

フォーラムニュース Vol.45 2022 12/10

発行：フォーラム・子どもたちの未来のために実行委員会

<http://www.f-kodomotachinomirai.com/>

文責：大竹永介
赤石 忍

私が見た“政治とメディア”の現在

11/28 金平茂紀氏

オンライン講演会開催！

2022年11月28日18時より、「政治とメディアの現在」と題してジャーナリストの金平茂紀氏をお招きしたオンライン講演会を催しました。当日は北海道での講演会を終えて帰京され、早稲田大学での講義をぬってお時間をとってくださるというお忙しい中での講演でしたが、約130名の聴衆に対して熱く語っていただきました。以下は実行委員の赤石忍による講演要旨です。



1953年に北海道で生まれた私はいつも、講演に先立って聴衆の皆様へ、或る曲をお流ししています。私の大好きなシンガーソングライターの故忌野清志郎氏の曲で、タイトルは「言論の自由」。その歌詞には「本当の事なんか言えない。言えば殺される、本当の事なんか言えない。言えば潰される」とあります。まさに現在、私たちは、そのような状況の中に存在しています。だからこそ私たちはその打開のために「本当のことしか言わない」ことを目指さなければいけません。特にメディアに関係する者たちは事実を伝えることを、今以上に志向していかなければならないと考えます。

本年2022年を振り返ってみますと、おそらく後世の歴史家たちが「歴史の転換点」と位置付けるように、まさに様々なことが起こった一年でもありました。この転換期の大きな特徴としては、「言葉の急激な変質」が挙げられます。これはSNSの影響とも思われますが、例えば「親ガチャ」という、ソーシャルゲームをベースにした言葉が流行しています。この言葉は「子どもは親を選ぶことができない」ということを意味していますが、安倍元首相狙撃事件の容疑者山上徹也被告の動機背景、旧統一教会問題にも繋がっています。また、安倍・菅政権さえ唱えなかった「原発新規増設」、軍備費増強に加担する「有識者会議」、沖縄・南西諸島の「軍備最前線化」、与党と野党に中間で増殖す

る、極右と言ってもいいような「ゆ党」、東京オリンピックに続く大阪万博のような「メガイベント」などのように、或る日突然、言葉として身近に存在するようになり、それが国の政策として、いつの間にか推進されていきます。それが「灰色の朝」とも言える、私たちを取り巻く現況と言ってもいいでしょう。故赤木俊夫氏が告発した、森友事件における財務省決裁文書改ざんを国家ぐるみで隠ぺいしたことなどを振り返ると、「果たして日本は、本当に民主国家なのか」という、原点に回帰するようにも思われます。

※

2022 年を「歴史の分岐点」とすると、コロナ禍の中で起こった二つの大きな事件、「ロシアのウクライナ侵攻」と「7・8 事件（安倍元首相狙撃事件）」が、それに当たると思います。前者は世界で巻き起こっているナショナリズムの台頭、まさに「国家とは何か」を突きつけられた出来事でした。当事者外で二分されている正義論と平和論。正義の戦争を貫徹せよと言う立場と、戦争そのものが人間とインフラを破壊するという立場の背反ですが、外交的手段で解決する役割を担うべき、国連も機能不全を起こしています。

後者の7・8 事件は、歴史の「パンドラの箱」が空いた、とも言えるものでした。政治的な抹殺に根差した為政者「暗殺」ではなく、一般の市民が手製の銃で、個人的な憎悪による元首相「狙撃」という特殊性。国民の過剰反応、興奮状態を利用し、この機会に安倍元首相の神格化をはかろうとした「国葬」。作家の高村薫氏がすぐさま指摘したように、よくも悪くも「空気が一変した」とも言えるでしょう。また作家の辺見庸氏は「この事件は近視眼的には過ちだが、多くの問題を抱えている」と発言していますが、まさしくその通りだと思います。献花台周辺では、「帰れ、お前ら日本人か」と罵倒する献花者と国葬反対者との確執、遺体を乗せた霊柩車は防衛省を經由し、会場には自衛隊の儀仗隊が溢れている異様さ、また、メディアトップや地方の首長への参列招待の在り方やその対応など、様々なことを考えさせる課題が含まれているのではないのでしょうか。

※

ロシアのウクライナ侵攻を「歴史の切断点」と言いましたが、世界でも日本でも、そのような切断点が存在します。例えば、アメリカにおける2001 年の「9・11 アメリカ同時多発テロ」、あれから民主党、共和党問わず、アメリカにおいては、テロとの戦いを国是となりました。また、「ベルリンの壁崩

壊」は欧州の構造を変化させ、中国では1989年の天安門事件から、イデオロギーと民主主義の切断がはかられるようになりました。マスクをしない人を冷視するコロナパンデミック、東日本大震災は人々の「暮らし」に対する意識を変えたようにも思います。

このウクライナ戦争は、憲法9条の「戦争放棄」の根源的な精神をも変えつつあるように思います。自衛に対して、いかに考えるべきかと問いを基に、軍備の増強を私たちに迫っています。プーチン・ロシアは戦争という言葉避け、「特別軍事作戦」という言葉を使用していますが、この行動はまぎれもなく「侵略戦争」です。日本も過去、「自衛」「平和維持」のために他国に軍隊を送り、それを「事変」と呼称しました。軍備を増強していくということは、将来的に現実を変質させ、言葉をも変質させていくように思います。

また、このウクライナ戦争を本当に理解するためには、「キエフ・ルーシの存在」「スターリンによる人為的な大飢饉ホロドモール」「独ソ戦争」「ナチスによるバビ・ヤールの大虐殺」「チェルノブイリ原発事故」「ロシアによるクリミア併合」「ドンバス戦争」「ミンスク議定書」など、その歴史理解を深めていく必要があります。表層的に判断するのではなく、それらを踏まえて、プーチン・ロシアの侵略を糾弾していく必要があるでしょう。

※

以前、私がロシア特派員時代に感じていたことに、将来的なロシアのウクライナ派兵がありました。ドネツク州、ルハンシク州の通称ドンバス地方への侵攻は予想がついたもの、よもや、キーウ、ハリキウ、ヘルソンなど、4方向からの全面戦争とは思いませんでした。2022年2月24日、ロシアのウクライナ侵攻の情報を得た時、すぐさま現地へいかなければと思い、トルコ・イスタンブール経由で首都キーウに向かうことにしました。しかし、イスタンブール空港で足止めされ、モルドバ経由に切符を変更しましたが、それもかなわず、ルーマニア・ブカレスト経由で、陸路ウクライナに向かいました。

詩人パウル・ツェランの生誕地である、西部の都市チェルニウツィーで取材を続けましたが、大勢の人々が旧ソ連時代の工場内の核シェルターに避難していました。また、国境沿いの検問所では他国へ逃れる、ウクライナ人民が列を連ねていましたが、妊婦の方に順番を譲るなど、整然と行動していたことに安堵の念を覚えました。

当時、駐在していた日本のメディアはどのように対応していたのかと言われると、欧州、アメリカ、中東等のメディアに比べますと、腰が引けていたよ

うに思います。大方の日本メディアは、国外や比較的安全なリビウに退去して報道をしていました。NHKなどは、国外退去の指示が出ていたようです。それに比して、イギリスのBBC、アメリカのCNN、中東のアルジャジーラなどは、戦争状態の現地に残って報道を続けていましたし、特にBBCは、ロシア兵の戦死体をそのまま映像化し、ロシアはまず前線に、チェチェン人等、少数民族を当てることを、事実として伝えていました。

なぜ現地に残って報道することが必要なのかと申しますと、戦争当事国は「勝つための報道」しかしなくなる、ということです。双方が勝利のために、必ず事実を曲げて報道する、パラレルワールドを出現させるからです。プロパガンダ報道は歴史的な常套手段ですから、中立的な立場からの報道こそが必要です。世界に事実を伝える、そのような姿勢が他国の報道機関に比べて、日本メディアには薄れてきているように感じました。

※

ただ私たちが忘れてはいけないことに、ロシア＝プーチンではない、という事実です。それはロシアの同盟国ベラルーシでも同様で、為政者のルカシェンコ大統領の発言と裏腹に、私のミンスクでの街頭取材で、人々は「プーチン反対」「間違っている戦争」と言い切り、これこそが大多数の「民の声」だと認識しました。

しかし、日本だけでなく、世界では「ロシア嫌い」が進んでいます。世界的なオーケストラ指揮者であるゲルギエフ氏は、プーチンとの親交を理由に各国の交響楽団から解雇・解任されました。有名なソプラノ歌手のアンナ・ネトレプコ氏、ポリショイ・バレー団等も同様です。スポーツ界の締め出しだけでなく、チャイコフスキーやドフトエフスキーなどの曲目、作品の忌避、あの反体制の象徴でもある、ソルジェニーツィンさえも避けられていることを、私たちはどう考えたらよいのでしょうか。NHKはロシア語講座を取止め、NHK-BSの海外ニュースさえも、ロシア・ウェスティの報道を流さなくなっています。

このことは、ロシアと敵対している各国為政者の意向が働いているのかどうかは判然としませんが、すくなくともメディアに関与しているものは、事実に基づいた中立的な立場に位置する必要があります。汚い言葉ではありますが、「強い者のケツを舐める」という表現があります。これは、すすんで権力者に取り入ることを意味しますが、このような生き方、奴隸的な従属は、ジャーナリストとしてだけでなく、「人」としてもしたくはない、してはいけないと思います。今私たちは、このウクライナ情勢の中、「憲法改正（悪）」「防衛

費増大」「基地機能強化」「核シェアリング」など、日本にとって重要な、歴史的な問題を突きつけられています。これらに対し、「戦争はしてはいけない」「正義の戦争等はない」「武器供与は戦争加担である」と、私たちは明確に意思表示すべきであると、改めてそのように考えています。（文責・赤石）

★90分超の講演の後は休憩をはさんで質疑応答。時間の関係で全ての質問にはお答えできませんでしたが、ジャーナリスト志望の高校生からの「報道の将来について。報道する側と受ける側にもとめられるものとは？」という質問もあり、金平氏が「一緒に考えましょう」と答えられたのが印象的でした。いつもに比べて若い世代の参加も多く充実した会となりました。（編集部）

~~~~~講演を聴いて~~~~~

★講演会に参加された方のうち3名の方から感想をお寄せいただきました。到着順にご紹介いたします。

●戦争を止めるには 森埜こみち

わたしの関心はなんといってもウクライナ問題にありました。あれをやられたらたまらない。あんなやり方が許されていないわけがない。どうやったらロシアを止められるのだろう。ウクライナ軍が国境付近までロシア軍を押し戻し、それでやっと和平が締結されるのだろうか。それならば、早くそうなってほしい。そのために兵器が必要ならば与えてほしい。そう思っていました。

しかし金平さんは正義の戦争などないと言います。戦争の本質は人殺しであり、ウクライナが求める「兵器の供与」に応じることは、人殺しに加担することになると。それはわかる。でも、それなら、ウクライナはどうすればいいというのだろう。攻め込んでいるわけではない。攻め込まれているのだ。自国を守ることも許されないのか。虐殺されたひとや拷問を受けたひとがたくさんいるのに、それでも武器をとってはいけないのか？ そう思いながら、講演を聞き続けました。

金平さんが取材体験を語ってくださり、やっとひとつの答えに気づかされました。金平さんがロシア寄りのベラルーシで街録をされたときのことです。本音を語ってくれるひとはいないだろうと予想していたのに、「この戦争は間違っている。わたしは反対だ。発言することで、わたしに不利益が生じたとしても構わない。あれは間違っている」、泣きながら答えてくれたひとたちがいて、胸が熱くなったと。そこか。そこなのか。声は、耳を澄ませばいたるところにあるはず。その声を集めていけばいいのか。もしかしたら、武力を用いずに戦争を止めることができるのかもしれない。

ありがとうございました。（もりのこみち：作家）

●地下水脈でつながる二つの出来事 押川節生

金平氏は講演で開口一番、「2022年は歴史の切断点となる出来事が二つ起きた。安倍首相銃撃殺害事件とロシアによるウクライナ侵攻だ」と述べた。この二つの出来事は地下水脈でつながっているように思う。銃撃殺害事件では旧統一教会と自民党の癒着ぶりが明らかになり、パンドラの箱が空いた観がある。元首相が推し進めてきた、国家安全保障会議(NSC)設置、閣議決定による集団自衛権の限定的行使、安保法制の制定、さらにウクライナ侵攻を受けての核シェアリング論や、台湾海峡危機とリンクした防衛強化論など、どれも従来の政府が主張する専守防衛や非核三原則の堅持とは大きく乖離する。年末には防衛力強化のため

安倍内閣時代に策定した国家安全保障戦略が改定される。岸田首相は 27 年度時点で防衛予算を従来のGDP比1%から2%に倍増する方針だが、内容にかかわらず予算規模だけが独り歩きしている。

その改定に向けた政府による非公開の 52 人からなる有識者との意見交換には、元外務・防衛官僚、元自衛隊将官、国際政治学者などが入り、大手新聞社の社長、会長も対象者として含まれているとのこと。「それなのに憲法学者はいない。そのような有識者懇とはいったい何なのか。国民は何も認めていないのに非公開で進めるやり方はどうかと思う」と金平氏は憤る。いよいよ憲法 9 条の換骨奪胎化が進む。金平氏は「今ほど 9 条の精神が大切にされ、求められるべきときはないと思う」と訴える。全く同感だ。（おしかわせつお:編集記者）

### ●気づけば戦時下 田中正美

金平さんの、取材の姿勢にまずは驚かされました。ウクライナへのロシア侵攻を予測するだけの情報力を持って、攻撃二日前に現地に向かい、困難な行程を経てたどり着いて、状況をとらえておられたことです。

日本のメディアの対応については、現地で直視された状況に、悲しい現実を知りました。欧米・中東のメディアが、本来の使命として、当事国は自国が勝つための報道に片寄る状況下、第三国として自分の目で取材し起きている事実を報道する中、一斉に現地から逃げてしまったダメな姿勢を突き付けられました。

このような日本のメディアの現実を踏まえて、「歴史の切断点」ともいえる 2022 年の日本の状況をどう報道すべきなのかを、強く考えさせられます。

「ウクライナ戦争」と安倍元首相銃撃殺害の「七・八事件」は、日本の歴史の大転換点になるのではないかとおっしゃっています。

日本でも、「正義のための戦争」が正当化されて軍備拡張がされる中、統一教会につながって破壊されてきた政治と「信仰」の仮面に隠れた金銭収奪と子どもの人生破壊が暴かれる一方で、国葬の強行で安倍賛美が行われました。

軍拡、原発再稼働と新設、増税などと、現政権の悪政オンパレードのもと、憲法 9 条を重視した平和を守る視点が強く求められる状況にあります。

気づけば戦時下となってしまったかつての歴史を踏まえて、メディアの在り方について主権者たる私たちに関心を持ち、関わる必要性を痛感します。

（たなかまさみ:童心社取締役相談役）

●今年最後のフォーラムニュースは、先月 28 日に開催された金平茂紀氏の講演会報告です。参加者のうち 3 人の方の感想も交えていつもよりボリュームたっぷりの号となりました。多くの示唆に富む金平氏の講演内容とともにお楽しみください●また当日の録画は後日 YouTube にもアップする予定です。ご期待ください●金平氏の言葉を借りれば「分岐点としての 2022 年」も最後の月を迎えました。ここにきて防衛費の GDP2%と敵基地攻撃能力を認めることで自民・公明両党が一致、との報道。あれよあれよという間に「専守防衛」であったはずの日本の防衛政策の基本が大きく変わろうとしています。しかも、私たちの手の届かないところで。私たちが本当に自分たちの手に「政治」を取り戻す日はくるのでしょうか●新型コロナウイルスの感染も終息しないまままた新しい年を迎えます。●来年こそは、と思うことばかりですが、まずは何とか健康で年を越したいものです。皆様どうぞよいお年をお迎えください (o)